

4. 「清國二十万分一圖」に関する訂正と補足

小林茂（大阪大学名誉教授）・片山剛（大阪大学名誉教授）

『外邦図研究ニューズレター』12号を2021年3月に刊行して以後、紹介した清國二十万分一圖について訂正すべきことがみつき、またその間に同図群について補足すべきことが判明したので、以下に示したい。

訂正は、『外邦図研究ニューズレター』12号に掲載した『南清地方』をカバーする『清國二十万分一圖』について：アジア歴史資料センターの小山史料所収図の検討から（小林・片山 2021）の付表（96-97頁）の誤りをただすものである。

これに対し補足は、日清戦争までに作製された

清國二十万分一圖のカバー範囲が、それ以後大きく北方に拡大されていたことが判明し、それを示す一覽図の全容を紹介するもので、あわせて本号所収「日清戦争末期の満洲軍総司令部ならびに第一軍作成の野戦用図」（小林茂）の満洲軍総司令部製の20万分の1図に関する記述を補う。

1. 『南清地方』をカバーする『清國二十万分一圖』の付表の訂正

浙江省をカバーする清國二十万分一圖を示す表2の一部ならびに、湖北省をカバーする清國二

表2 誤

| 番号 | 図番号 | タイトル | 経度 | 緯度 |
|----|-----|-----------------------|-----------|-------------|
| 6 | 259 | 清國浙江省 紹興府諸暨縣浦江縣上虞縣新昌縣 | 120-121°E | 30°-30°40'N |

表2 正

| 番号 | 図番号 | タイトル | 経度 | 緯度 |
|----|-----|-----------------------|-----------|-------------|
| 6 | 259 | 清國浙江省 紹興府諸暨縣浦江縣上虞縣新昌縣 | 120-121°E | 29°20'-30°N |

表3：湖北省 誤

| 番号 | 図番号 | タイトル | 経度 | 緯度 |
|----|-----|-----------------------|------------------------------|----------------|
| 1 | 239 | 清國湖北省 黄陂縣 | 114-115°E | 30°40'-31°20'N |
| 2 | 248 | 清國湖北省 蕪州蕪水縣廣濟縣黄梅縣大冶縣 | 115-116°E | 30°-30°40'N |
| 3 | 247 | 清國湖北省 蕪州府黄冈縣武昌府漢陽府漢口鎮 | 114-115°E | 30°-30°40'N |
| 4 | 187 | 清國湖北省 九江府南康府湖口縣彭澤縣 | 116-117°E | 29°20'-30°N |
| 5 | 186 | 清國湖北省 興國州德安縣瑞昌縣 | 114-115°Eただし 誤記で115-116°N | 29°20'-30°N |

表3：湖北省 正

| 番号 | 図番号 | タイトル | 経度 | 緯度 |
|----|-----|--------------------------|------------------------------|----------------|
| 1 | 239 | 清國湖北省 黄陂縣 | 114-115°E | 30°40'-31°20'N |
| 2 | 248 | 清國湖北省 蕪州蕪水縣廣濟縣黄梅縣大冶縣 | 115-116°E | 30°-30°40'N |
| 3 | 247 | 清國湖北省 蕪州府黄冈縣武昌府武昌縣漢陽府漢口鎮 | 114-115°E | 30°-30°40'N |
| 4 | 187 | 清國江西安徽湖北省 九江府南康府湖口縣彭澤縣 | 116-117°E | 29°20'-30°N |
| 5 | 186 | 清國湖北江西省 興國州德安縣瑞昌縣 | 114-115°Eただし誤 記で115-116°N | 29°20'-30°N |

十万分一圖を示す表 3 を前頁のように訂正する。
 なお、湖北省に関する 5 つの図幅の接合関係を図 1 のように図示しておきたい。



図 1：湖北省の清國二十万分一圖の接合関係

2. 「清國二十万分一圖一覽表」(1905 年 3 月) に 見える 20 万分の 1 図のカバー範囲の拡大

華北から満洲の南部をカバーする「清國二十万分一圖」は、1880 年代の陸軍将校の旅行によって作製されたトラバース測量図を編集して日清戦

争開始期までに作製された。その整備状況は、1894 年 9 月の「清國二十万分一圖一覽表」(図 2、小林ほか 2017: 92 も参照) に示されている。「(渤海近傍六十三版)」と構成を示す副題がある。ただしこの図は印刷後まもなく、ゴム印で東北部分に 4 図幅 (図番号: 150、151、155、156) が追加され、上記の「六十三版」が「六十七版」と訂正された。

こうした清國二十万分一圖は、中国大陸の北部を広くカバーするものではあったが、記載は少数の将校の旅行ルートに記載に限られ、大きな中心地とそれを結ぶ交通路を示す点と線の地図であった。ただし、日清戦争以後中国大陸における測量は反日感情もあって容易ではなく、義和団事件に際しての天津付近および山海関付近や厦門周辺の測量 (小林・小林 2013; 小林 2021) に限られたと考えられる。

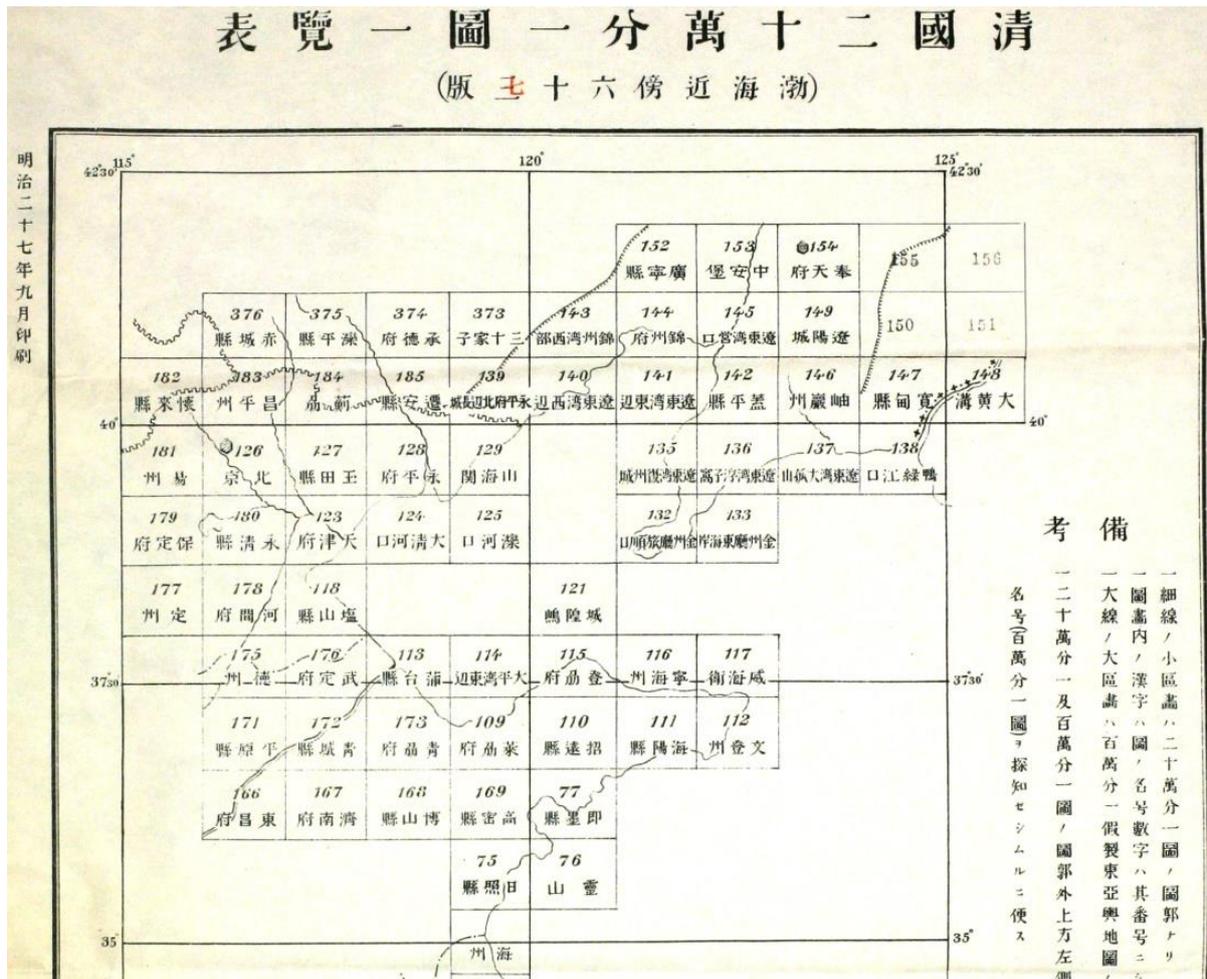


図 2：「清國二十万分一圖一覽表」(1894 年 9 月、アメリカ議会図書館蔵) の北半部

他方、義和団事件以後満洲を占領したロシアとの緊張がつづき、1880年代に陸軍将校が広域的に旅行して作製したトラバース測量図を利用して、より北方の地域について20万分の1図の作製が続行されたと考えられる。

関連して注目されるのは、アメリカ議会図書館に収蔵されている将校たちの手描き原図には、図2に示された図幅の範囲外に位置するものでも誤差補正用に引かれたと考えられる鉛筆書きのグリッドが見られることが多い点である（小林ほか2011: 87-97、また小林編2017の口絵写真3倉辻靖二郎『従三道嶺至甯古塔路上図』にみられるグリッドを参照）。グリッドのみられる図は、図2の示す図幅の範囲外の地域にあっても、20万分の1図の資料として利用され、そのカバー範囲の拡大に使われたことを示すものであろう。

つぎに示す「清國二十萬分一圖一覽表」（1905年3月、図3）は、日露戦争開始期に左手の矢印から東側の図幅の増刷を指示する命令（アジア歴史資料センター資料JACAR: C06040589100）に添付されたもので、その北方・東方に向けた拡張が注目される。1894年9月の「清國二十萬分一圖一覽表」にみえるカバー範囲の北限は、図2の東部では「154 奉天府」など（北緯42度）、西部では「374 承德府」など（北緯41度20分）までであったのに対し、とくに図3の東部では北緯44度を越えている。また図3ではカバー範囲が東に大きく伸びて、その先端は「浦塩斯徳」（ウラジオストク）にまで達する。上記口絵写真の倉辻の図は、最北の寧古塔付近のルートを描くのに利用されたと考えられる。

ただし、残念ながらこうして増加したと考えられる図幅にはまだ接する機会がない。本号所載の「5.日露戦争末期の満洲軍総司令部ならびに第一軍製の野戦用図」（小林2022）の表1-3ならびに図1-9に示した20万分の1「南満洲圖」（1905年3月）からその姿をうかがうことができるが、図幅名が変化しており、日露戦争中に改訂が行われ

たことがうかがえる。

このような点から日清戦争後に準備された清國二十萬分一圖は、残存するものが少ないことがうかがえるが、他方それは日露戦争のような近代戦では、使用に耐えないものと考えられていたようである。鴨緑江軍の参謀長を務めていた内山小二郎少将は、1905年2月に、「當軍作戰地域中賽馬集附近ヨリ以北ハ不完全ナル二十萬分一圖ヲ有スルニ過キス故ニ此際至急測量班ヲ配附セラレタシ」という電報を参謀本部に送っている（JACAR: C06040316200）。賽馬集は東部山間地の中心地のひとつで、臨時測図部が測量を担当した地域であるが、まだそれがいきとどかなかったようである。小林・片山（2021）で検討した華中・華南地域をカバーする清國二十萬分一圖（前頁の図1を参照）も派遣された測量担当者の参考資料に利用されただけで、その役割は日露戦争期にはほとんどなくなっていたと考えられる。

文献

- 小林茂・片山剛 2021. 「『南清地方』をカバーする『清國二十萬分一圖』について：アジア歴史資料センターの小山史料所収図の検討から」外邦図研究ニューズレター12: 93-99.
- 小林茂 2022. 「日露戦争末期の満洲軍総司令部ならびに第一軍製の野戦用図」外邦図研究ニューズレター13
- 小林茂編 2017. 『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会.
- 小林茂・小林基 2013. 「北清事変に際して作製された2万分の1『山海関』地形図」外邦図研究ニューズレター10: 53-59.
- 小林茂・渡辺理絵・山近久美子 2017. 「中国大陸における初期外邦測利用の展開と日清戦争」小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 76-111.

